

学内グラント 終了時報告書

平成18年度 学内グラント報告書

高等学校における性教育の現状と課題 —大学1年次生の認識調査をもとにして—

研究代表者 岡部 恵子(埼玉医科大学 保健医療学部 看護学科)

分担者及び研究協力者 佐鹿 孝子*, 大森 智美*, 久保 恭子*, 安藤 晴美*,
坂口 由紀子*, 穴戸 路佳*

1. 研究の背景

1) 「健やか親子21」が示す思春期の課題

「健やか親子21」(2000)¹⁾は、21世紀の母子保健の主要な取組みの方向付けとして、①思春期の保健対策の強化と健康教育の推進、②妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援、③小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備、④子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減といった4つの課題を設定した。そして、「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」に関する問題認識を、思春期の人工妊娠中絶や性感染症、薬物乱用等の増加等の問題や心身症、不登校、引きこもり等の深刻化とし、これらの問題解決は極めて困難であり、解決の方策は量的拡大とともに質的転換を図ることが不可欠とし、改善への努力の強化の必要性を強調し、10年後の目標を数値をもって示した。2006年の中間報告²⁾において、人工妊娠中絶は減少傾向にあるが性感染症は増加しているという結果を示し、思春期の性感染症については望まない妊娠の問題とあわせて適切な性教育の下で対応すべきとした。が、一方、性教育の適切な指導者が少ないこと、適切な教材についての共通の理解が得られていないことを問題としてあげている。

2) 埼玉県の思春期の保健対策

本学の理念に地域社会への貢献があげられている。埼玉県にある本学であるから、埼玉県下の思春期の問題の現状を把握し、解決のために活動することは看護学科に籍をおく者の重要な役割である。埼玉県は、「健やか親子21 検討報告書」の基本的な考え方を踏まえ、平成14年に「彩の国健やか親子21～親と子の心の健康支援～」³⁾を示した。その基本方針は、「安心かつ

安全に子どもを産む育てることの出来る環境づくり」「子どもの心と体の健康に関する社会づくり」「児童虐待から子どもを守る社会づくり」であり、当面の5年間の最重点課題を①小児・思春期精神保健医療体制整備の促進、②児童虐待の予防・防止対策の推進の2つとしている。

埼玉県の2000年における10代の人工妊娠中絶は、全国では女子人口千に対して12.1であるのに対して9.1と低値である。が、山本は「埼玉県下における性感染症罹患の実態」⁴⁾の報告において、年齢階級別にみた性感染症の罹患頻度(女子)の最多は20～24歳で2,604.8人、次いで15歳～19歳が1,572.8人であり、性器クラミジア感染症、淋菌感染症が多く、同じ年の性感染症学会による全国的な性感染症サーベイランス報告と比較し埼玉県は20歳～24歳の発症数において約1.5倍の高値であり、15歳～19歳においても全国の値を凌駕しているとする。そして、「埼玉県における性感染症罹患数は全国と比較して、とくに10歳代、20歳代が突出して多いことから、この年代を中心に、性感染症予防に対する積極的なキャンペーンを行うことが急務である」と結論している。埼玉県においても、「思春期の健康と性の問題」について積極的に考えていかねばならないことが分かる。

3) 成長発達課題としての思春期における性感染症、人工妊娠中絶

性感染症、人工妊娠中絶ともに性的接触と関連するという特質を有する。であるから、人工妊娠中絶、性感染症を減少させていくには、思春期早期あるいは学童期から人間にとっての性行動の意味と性行動のもたらす結果について熟考できる教育が必要であり、思春期の性に関係する問題を、人間のライフサイクルの中の成長・発達の課題として捉えられるようにすること

* 埼玉医科大学 保健医療学部 看護学科

である。ルソーは⁵⁾、人間は二度この世に生まれるとし、一度は人類の一員として、二度目は性を持った人間とする。そして、石川⁶⁾は以下のように述べる。思春期は第二性徴期であり身体変化の大きく、この身体的変化が「性」を意識させる。からだは大人になるが心の発達にはこれに追いつかず、からだの心の極度のアンバランスを体験するのである。思春期の第二性徴は、種族保存本能ゆえの変化であり、種族保存のためのホルモンの変化が基本的欲求としての性衝動の起因となる。第二性徴は、おもに生殖腺から分泌される性ホルモンの作用によって生じ、生理的・心理的・社会的な変化があまりにも大きすぎるため、それをどのように統合したらよいのかの探索のなかにおかれる。とくに、性ホルモンの分泌による性欲の問題は、思春期・青年期の子どもの自己イメージに大きなゆらぎをもたらす、そのゆらぎのなかでの不安定さに対して、自分自身を過剰な自意識で覆い隠そうとするが、その抑圧は長くは続かず、成長とともに身体側からの反撃が起こる。その最もわかりやすいのが、より直感的に自分を感じられる性的な衝動の実現を表現していくことであり、それにより自分の全体性を回復しようとする機能をこの時期にはもつ。

急務とされる思春期の性教育は、思春期の若者自身が成長過程として出現する性ホルモンの変化による生殖本能としての性衝動、性行動を、どのように受け止め、どう行動するとよいかを考えられるようにすることが肝要になる。

4) 高校生の性と性教育に関する意識

平岡は⁷⁾1440名の高校性を対象に性と性教育に関する意識調査した結果、「男子高校生のセックス」について、肯定群が76.9%、否定群が13.5%、不明群(わからないあるいは無回答)9.5%、「女子高校生のセックス」については、肯定群は75.8%、否定群14.4%、不明群は9.8%である。また、「中学生の中絶」については、肯定群36.5%、否定群45.4%、不明群18.1%に対し、「高校生の中絶」には、肯定群38.1%、否定群44.2%、不明群17.6%であった。中学生の中絶に比して高校生の中絶の肯定がやや高くなっている。これらの結果は、性本能のもたらす性衝動とそれに伴う性行為は本能として、あるいは、思春期のゆらぎを癒すものとして認めざるを得ない状況におかれていることを意味する。中絶を肯定していることは、「産めない」「育てられない」ゆえの「やむを得ない」といった現実問題への対処としての肯定であって、人工妊娠中絶が胎児の生命の軽視の思考であるとは必ずしもいえない。性教育に関しては、「望まない妊娠を予防する教育」「STD・エイズ教育」の2項目についていつから行うとよいと考えているかの問いに⁷⁾対しては、「望まない妊娠予防」については、小学校低学年7.4%、小学校高学年27.6%、中学生が52.7%、高校生

が6.8%であり、必要ないが3.5%、「STD・エイズ教育」については、小学校低学年が11.2%、小学校高学年が34.4%、中学校が45.8%、高校が4.2%であり、必要ないが2.6%である。

この結果からも、人工妊娠中絶や性感染症の減少にむけて、現に実施されている高校生への性教育のあり方を再検討していく必要性が示唆される。

5) 性教育の歴史的変遷

では、性教育は何を目指し、どのようにすすめていくとよいのであろうか。いま、性教育の歴史を振り返り、時代の変化との関係をも合わせて性教育を評価してみる必要がある。そこで、田能村の「性教は転換期を迎えたかー性教育の立場から」⁸⁾をもとに、わが国の性教育を振り返ってみた。

戦後、昭和24年に「純潔教育基本要領」が、昭和30年には「純潔教育の進め方」が発表され、昭和33年には文部省より小・中学校の学習指導要領が告示された。が、少年非行の増加の中では性教育より非行防止のための純潔教育に関心が集中していた。昭和40年代に性解放の風潮がより高まるという状況の中で、各都道府県教育委員会が「性教育の手引」類を続々刊行した。その中で性教育の目標には、性の悩みや不安の解消、性被害・性病を防ぐといった表現が多くみられ、また、昭和50年前後には人間の性を科学的にとらえる、性を総合的にとらえて合理化、人格化、社会化をはかる、男女の特質の理解、協力関係を築くといったことが示された。昭和54年には日本性教育協会が「性教育指導要項、同解説書」において、性教育の目標、内容を発表した。昭和61年、文部省は生徒の性的成熟が早まり、かつ、生徒を取り巻く社会環境が大きく変化し、性に関する問題行動の増加や低年齢化が問題になっていることを指摘し、「生徒指導における性に関する指導ー中学校、高等学校編」を発行した。性教育に代わって「性」に関する指導が広がっているという状況であり、この頃より性教育は保健と理科の科目において教えられるようになった。平成11年、「学校における性教育の考え方、進め方」を発刊し、学校における性教育の基本的な考え方、発達段階に応じた性教育の指導内容、指導方法などを示した。ここにおいてやっと性教育の基本的考え方、発達段階に応じた性的成熟の正しい理解などがあげられたことになる。

わが国の性教育は様々に揺れ動きながら進められてきたことが伺われる。これらの歴史的視点をもとに、田能村は⁷⁾、性教育を人間の「性」およびそれにかかわる事柄についての教育であるとした上で、人間の「性」は昭和40年代よりセクシュアリティの教育とされながらも、それを構成する下位の概念を問わずにすすめてきたと指摘する。また武田は⁹⁾、今日的性教育の課題に対して、文科省の性教育指針による「児童・生徒らの人格完成と豊かな人間形成を究極の目的とし、

人間の性を人格の基本的な部分として生理的側面、心理的側面、社会的側面などから総合的に捉え、生徒が生命尊重、人権尊重、男女平等の精神に基づく正しい異性観をもつことによって、自ら考え判断し、意思決定の能力を身につけ、望ましい行動を取れるようにすること」が基本であること、そのために性教育は発達段階に即した内容、教材であること、自己実現と共生の教育であり、学校の全教育活動を通じて行われるものであること、人間教育の理念と教育内容を保護者の同意と理解を得てすすめていくこと、児童・生徒に対する指導上の留意することの必要性を述べる。

これらの提言より、性教育の現状をみつめ、性教育のあり方について議論し、性教育のモデル作成への努力をすることが急務であることが分かる。

6) 性教育はだれが行うのか

「健やか親子21」の中間報告は、適切な教材についての共通理解がされていないこと、適切な指導者が少ないことを性教育の課題としてあげた。では、性教育は、誰が、何を、どのように行うとよいのであろうか。

岡本は¹⁰⁾、日頃から出産の場や人工妊娠中絶や若者の性感染症の治療場面に立ち会う機会の多い助産師が、思春期問題に悩む子どもたちの性にまつわる悩みの相談相手としての役割を担えるのではないかとし、その上で、養護教諭、保健担当教員、産婦人科の医師や看護師、保健師、助産師が、それぞれの職種の特性を踏まえた共同作業として行うことの必要性を述べる。看護職である安武¹¹⁾らも、「生と性の健康教育」は、学校保健と地域保健の連携した取り組みが必須とし、保護者、小学校教諭、養護教諭、保育士を対象に性教育に対する考え方、連携の実態、性教育の実施状況を調査した中で、保護者の多くは性教育を学校に任せきりにしている、わが子と性について語り合うことを敬遠していると回答していることを報告している。その上で、学校側も教育内容を保護者に伝えること、保護者の意見を把握することなどの必要性、すなわち、保護者も性教育に関わる必要があることを述べている。また、小学校教諭と養護教諭とでは性教育の理解状況や性について知りたい内容の認識に差があるとし、効果的な健康教育推進のためには、関係者の知識・技術の向上、教える側と教えられる側の相互交流や指導の評価システムが必要と結ぶ。

助産師である佐山は¹²⁾、小・中・高校の教諭や地域保健師と連携をとり性教育にかかわる中での気づきとして、問題に遭遇した時、それを直視して「どうにかしなければ」という気持ちが重要とする。これらは、看護職が性教育にかかわる際の具体策をもみせている。

2. 研究目的

以上の性教育をめぐる背景を重要視し、本研究は高校における性教育の実情を知り、高校における性教育

の問題を明らかにし、看護職としての性教育のあり方を考察することを研究目的とする。思春期の人工妊娠中絶、性感染症にかかわる問題の解決にとっては、高校における性教育の改善が急務と考え、高校の性教育に焦点をあてた。

3. 調査方法と調査内容

調査対象は、高校卒業直後の者の多い大学1年次生とし、高校時代における性教育についての認識を調査する。調査は、自記式質問紙法によるアンケート調査である。質問内容は、①個人の属性(年齢、性別、卒業高校の課程)、②高等学校における性教育の実施状況(授業担当者、実施時間、学外の講師の授業、内容、教材)、③性教育の効果、④高校の性教育に対する要望(授業担当者、内容)、⑤性に関する話し相手について、である。

4. 倫理的配慮

調査協力依頼時に、各大学の担当者に対し文書にて以下のことを伝えた上で承諾を得た。

- ・本調査の目的と意義
- ・本調査は無記名回答であり、大学名や個人名は特定できないように配慮をすること。
- ・調査用紙は研究終了次第、廃棄し、データは研究以外の目的には使用しないこと。
- ・調査結果は、学会等に報告あるいは学会誌等に論文投稿をする予定であること。

調査対象の学生には、回答は自由意志であること、回答したくない項目には回答しなくてよいことを記した文書をアンケート用紙に同封した。

5. 結果

アンケート用紙は、調査協力の承諾を得た5大学に計1229部を配布し、699部回収、回収率56.9%、有効回答率99.7%であった。

1) 対象の背景

アンケート回答者は、男子学生277名(39.8%)、女子学生420名(60.2%)、年齢は18歳・19歳が87.0%、20歳以上が13.0%であった。本学が所在する県下の高校卒業生は30.6%、県外は69.4%であった。教育課程は、男女共学が76.3%、男子校10.7%、女子校11.8%、課程別では(普通科、専門科、総合学科)では普通科が94.7%であった。

2) 高校における性教育の実施状況

性教育は、「教科時間内」の実施が79.2%、教科外時間6.1%、ホームルーム4.2%であった。性教育は62.2%が「男女合同」で受けていた(図1)。「性教育の授業は誰が行っていたか」を5つの選択肢より選択法で回答を求めた(重複回答可)。保健体育の教師最多で85.4%、次いで養護教諭13.4%、家庭科の教師10.7%、

クラス担任3.4%の順であった。18年度学外講師による性教育は、「受けた」が26.2%、「受けたことはない」は59.6%であり、学外講師は性教育の専門家(性教育を職業としている者)が最も多く30.6%、次いで医師18.9%、保健師11.7%、助産師10.0%、看護師3.9%、看護職養成校の学生2.8%であった(図2)。

3) 性教育の受講内容と使用教材

性教育受講内容について12項目をあげ、選択法で回答を得た(重複回答可)。最も多かったのは「性感染症」であり、以下「男女の身体のしくみ」「避妊の方法」「妊娠」「避妊の意味」の順に多かった。受講経験が少なかったのは、「異性の人格尊重」「異性の心理や異性とのつき合い方」「性被害」であった(図3)。12項目について「最も印象に残っているもの」は、「性感染症」が41.7%と最も多く、次いで「人工妊娠中絶」「男女の身体のしくみ」「避妊法」の順であった。「人工妊娠中絶」と「妊娠」は女子学生に多く、男子学生では「男女の身体のしくみ」と「避妊の方法」が多かった(図4)。

4) 性教育の効果の認識

高校時代の性教育が「理解できたか」「役立ったか」を5段階法で質問した。その結果、「よく理解できた」と「まあまあ理解できた」を合わせ、「理解できた」は82.2%であった。「理解できた」は男子学生75.7%、女子学生87.0%であった(図5)。性教育が役立っているかには「どちらとも言えない」が最も多く45.8%であり、「とても役立っている」と「役立っている」を合わせ、「役立っている」は42.7%であった。「役立っている」は、男子学生40.3%、女子学生50.0%であった(図6)。

5) 大学生の考える適切な性教育授業担当者と教育内容の要望の意味

「高校時代の性教育の授業担当者は誰が適切か」には、養護教諭(56.5%)、性教育の専門家(55.2%)が多く、次いで、保健体育の教師39.5%、保健師・助産師・看護師37.9%、医師21.9%の順であった。養護教諭は女子学生に、医師は男子学生に、「保健師・助産師・看護師」は女子学生に多かった。高校時代に「もっと聞

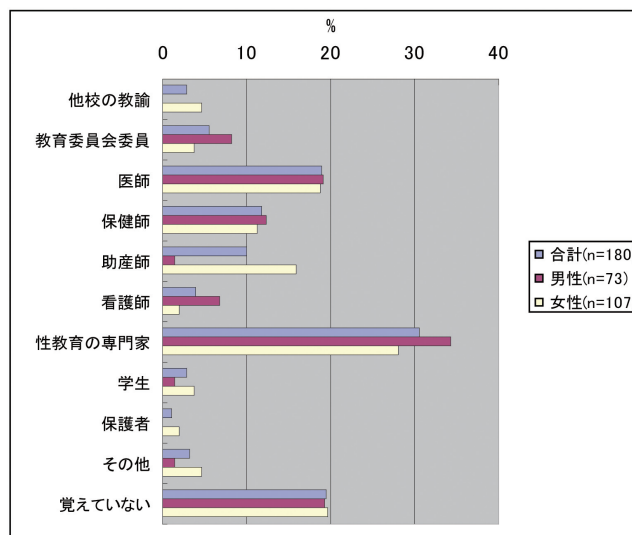


図2. 学外講師の職種.

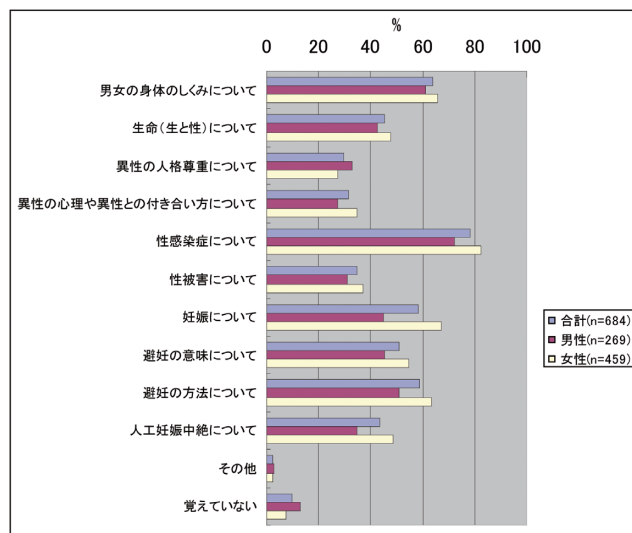


図3. 高校における性教育の受講内容.

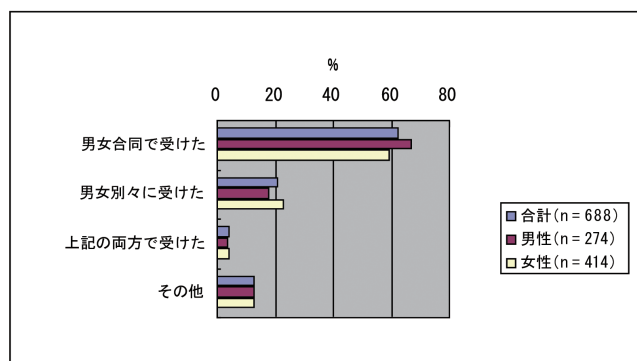


図1. 性教育の授業状況.

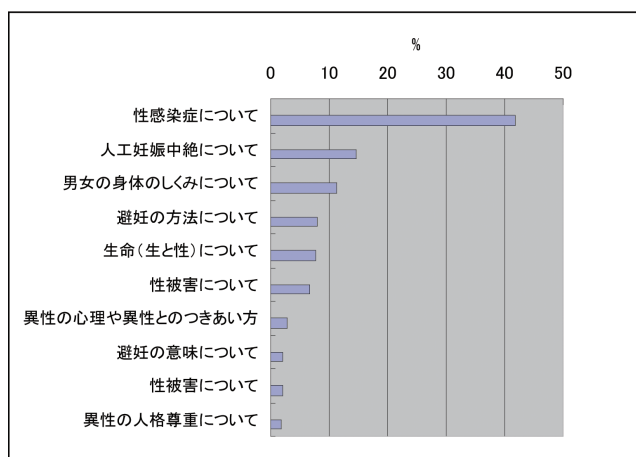


図4. 最も印象に残った性教育の内容.

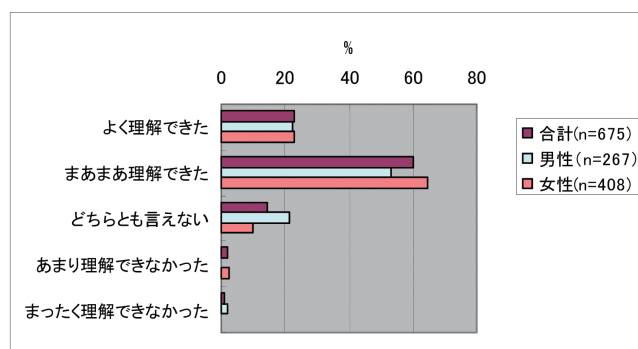


図 5. 性教育の理解度.

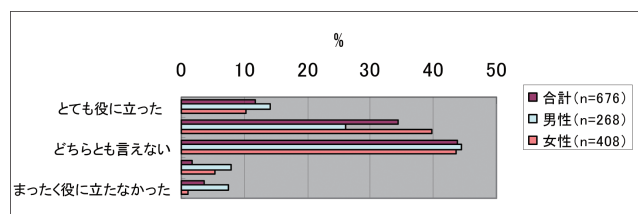


図 6. 性教育の役立ち度.

きたかった性教育の内容」は、「性感染症」が最も多く、次いで「妊娠」、「異性の心理や異性との付き合い方」、「人間としての生き方」、「避妊の方法」、「人工妊娠中絶」の順で多かった。「男女の身体的しくみ」は男子学生に、「妊娠」、「人工妊娠中絶」は女子学生に多かった。

6. 研究結果に基づく考察の概要

以上の結果より、本論文においては、①高校における性教育授業担当者の現状と課題、②高校における性教育の受講内容の再検討の必要性、③高校における性教育に対する看護職の果たすべき役割について考察した。(付：本研究は、現在、「母性衛生」(日本母性衛生学会に論文投稿し、査読結果をもとに加筆・修正中である。)

<引用文献>

- 1) 健やか親子21検討会：健やか親子21検討会報告書 厚生労働省発表 平成12年11月。
http://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_c_18.html
- 2) 「健やか親子21」推進検討会：「健やか親子21」中間評価報告書 厚生労働省発表 2006年3月。
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/03/s0316-4.html>
- 3) 埼玉県健康福祉部：彩の国 健やか親子21～親子の心の健康支援～ 2004
- 4) 山本勉：埼玉県における性感染症罹患率の実態 埼玉市民講座資料 2005：
<http://ssi.umin.jp/public/20050820-1/index.htm>。アクセス2006/10/02
- 5) J.J.ルソー『エミール』(1762) 世界の名著36 『ルソー』中央公論社 1978
- 6) 石川悦子：思春期に起こりやすいからだの危機 児童心理 1999; 53(3): 49-56.
- 7) 平岡友良：高校生の性および性教育に関する意識調査 思春期学 2003; 21(2): 192-9.
- 8) 田能村祐麒：性教育は転換期を迎えたか 性教育の立場から 思春期学2006; 24(1): 26-9.
- 9) 武田敏：性教育の現状論議と課題・展望 産婦人科治療 2005; 91(5): 482-3.
- 10) 岡本喜代子：助産師だから伝えられる生と性 SEXUALITY 2005; 023: 130-3.
- 11) 安武繁：学校保健と地域保健が連携した「生と性の健康教育」推進システムの構築に関する研究 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 2006; 6(1): 83-90.
- 12) 佐山静江：実りある性教育を実現するために 施設で働く助産師の役割と課題 助産雑誌 2004; 58(4): 9-14.